

平成 17～21 年度における授業改善への教員の自己評価と対応

平成 17～21 年度に実施した学生による「授業改善のためのアンケート」結果を踏まえた、専任教員の担当した授業の自己評価、および対応した授業改善の実施状況について以下に報告する。

時期：平成 17 年 4 月から平成 22 年 3 月まで

対象：教員 30 名

回答：記述式による報告書による

集計：各教員が指摘した改善点や問題点の記述から共通する内容を選定し、

FD・SD 委員会により類型化を行ったデータから分析・集計

1. 教員による過去 5 年間の「授業改善のためのアンケート」結果の分析

1.1 学生の評価が高かった点

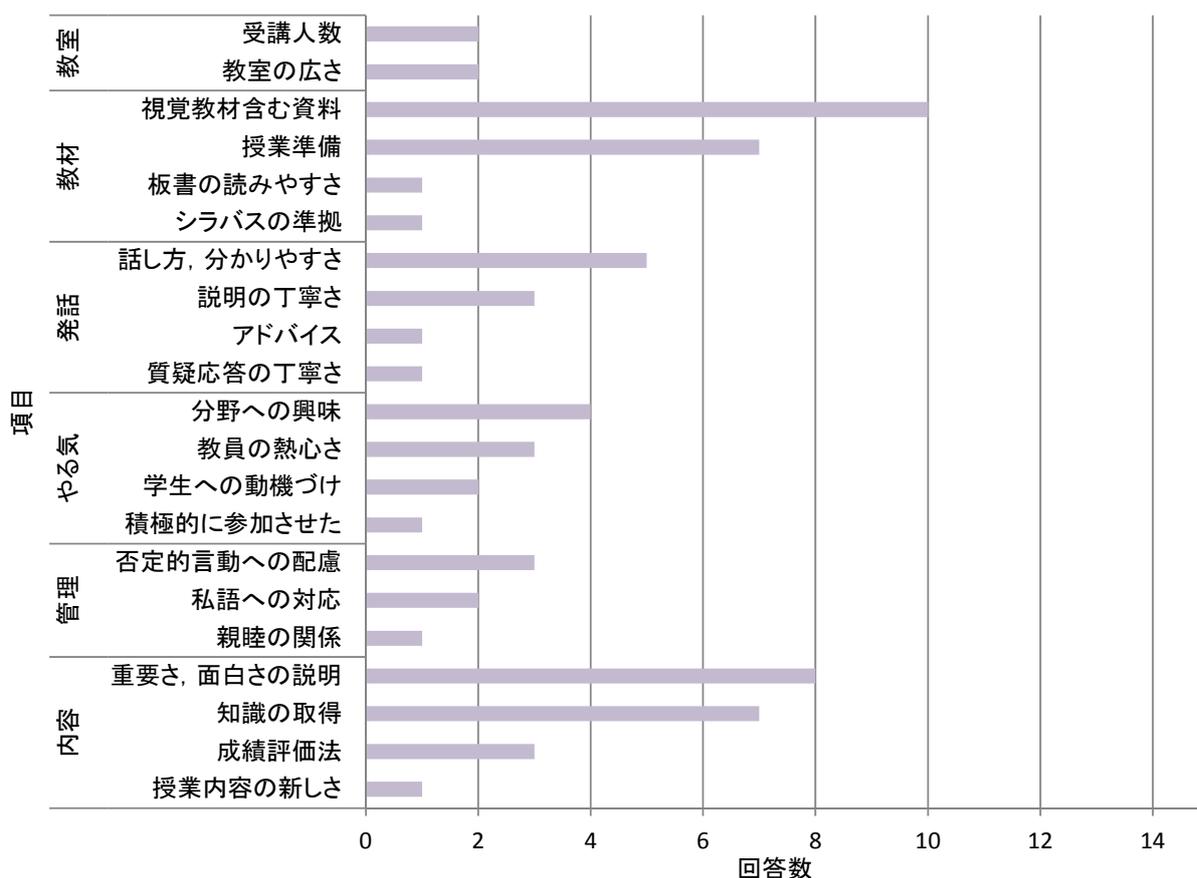


Fig1. 学生の評価の高かった点

学生からの評価が高かった点として、教員が認識しているのは上記の項目であった。

「教材」については、視覚教材の活用や授業準備の熱心さなどに高評価を受けたと感じた教員が多かった。「発話」については、声の出し方のような話し方そのものや、説明の丁寧さなどへの肯定的評価

を認識していた教員が多かった。また「発話」とも関連する項目として、学生の動機づけを高めるための工夫（「やる気」に区分される）や、受講生の授業参加への「管理」について、学生から支持されていると指摘する教員もいた。「内容」については、授業の重要さや面白さが学生に伝わり高評価を得たと自己評価する教員が多かった。

1.2 学生の評価が低かった点あるいは要望のあった点

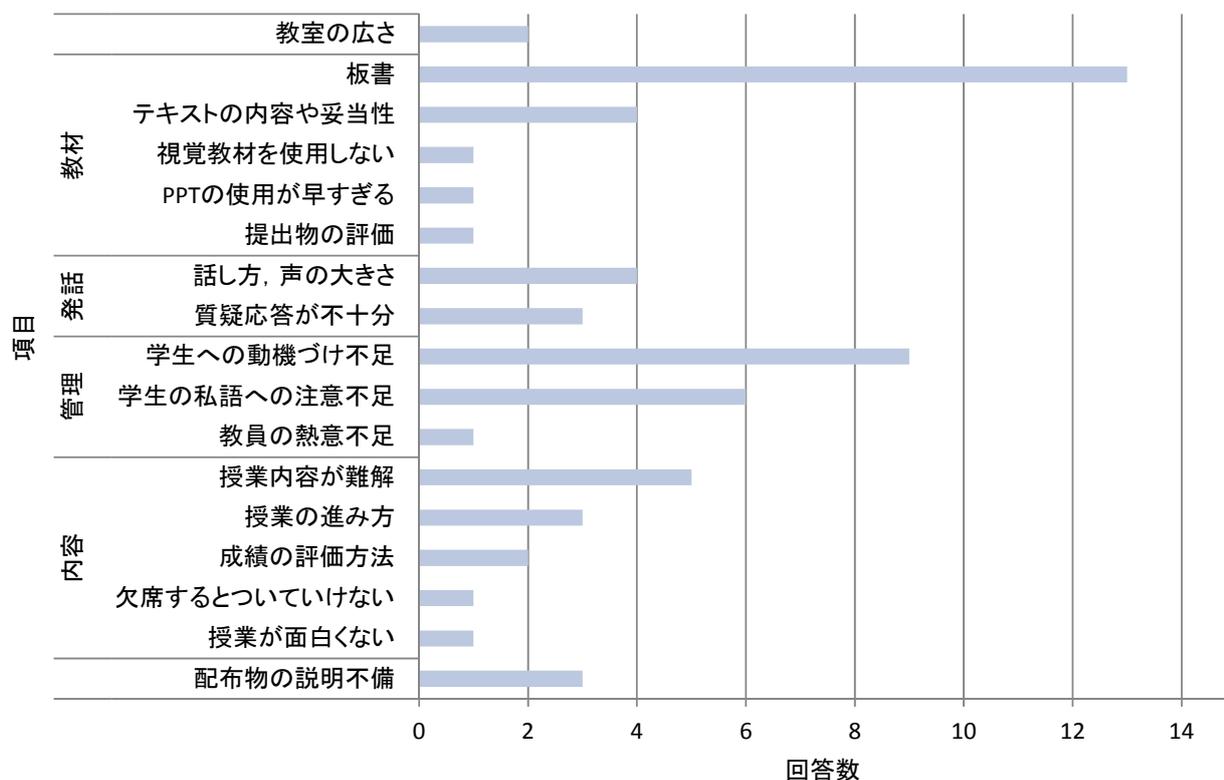


Fig2. 学生の評価の低かった点

学生からの評価が低かった点として、教員が認識しているのは上記の項目であった。

「教材」については、板書に関する評価の低さを指摘された場合は、それを教員側もよく自覚していることが伺えた。また、テキストや視覚教材そのものを用意しても、その使用法やレベル選択の説明が妥当でなかったことを教員側が認識する回答もあった。「管理」では回答傾向はさまざまであったものの、学生の積極的な授業参加を促すスキルについて、評価が低かったことを自認している教員が多かったといえる。「内容」については、多岐にわたり厳しい評価を受けていることを教員自身も捉えていることが伺える。一方でこれは、授業の本質的な反省点や問題点を教員自らが意識して受け止めていたことにもつながると考えられる。

後述のさまざまな授業改善への対応（2.1と2.3）と変更しない点（2.2）の記述からは、これらのネガティブな評価を受け止めた上での思案がなされていたことが報告されている。

2. 過去5年間に実施した授業改善

2.1 評価の低かった点や要望（1.2の分析）をふまえて行った授業改善

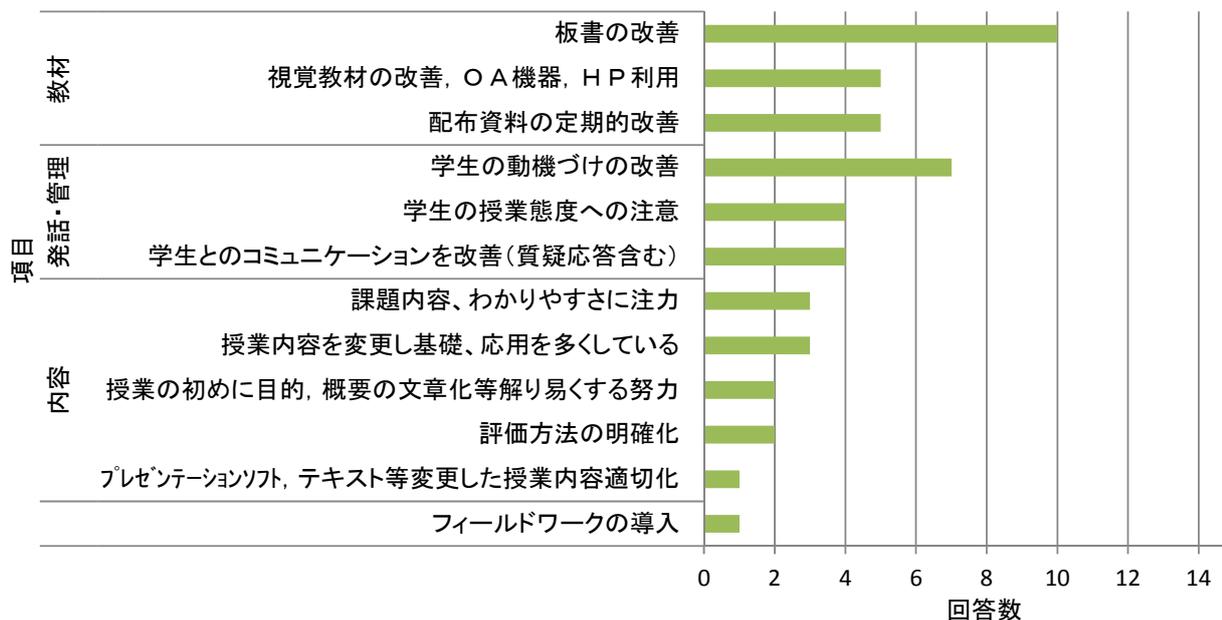


Fig3. 分析をふまえて行った改善点

評価の低かった点について教員が行った授業改善は上記の通りであった。

全体的傾向としては、板書の改善のように学生の評価が低かった項目を積極的に改善するものや、教材の自主的な改善を行うものが多かったようである。また、学生とのコミュニケーションや学生への動機づけに注意を払いながら改善する、授業の運営手法にも手を加えるケースもあった。「内容」については各授業で対応できる点が分かれたが、要約すると 1) 内容の難易度を学生の実情や個々の学生のレベルに合わせるような変更, 2) 授業の目的や意図, 評価方法など, シラバスの中でだけ指摘していた項目も, 意識的に授業のなかでレクチャーするような改善, といった対応がなされていた。

2.2 評価が低い, または要望があったが, 特に変更しない項目の理由

主な回答は以下の通りであった (抜粋, 記述を要約したものを含む)。

- ・ 基礎力・応用力をつけることが目的の授業のため, 特に変更しない。
- ・ 講義内容を各自が把握することが重要なので, 板書量を増大する必要はない。
- ・ 資料を準備して説明しているが, 欠席者が取りにこないこともあり, 増大する必要はない。
- ・ 手とり足とりして授業を行うことより, 学習の動機づけが大切と考える。
- ・ 1 時限目の時間帯を変更して欲しい, ヘッドフォンを消毒して欲しいなどは, 対応というよりも説明して理解を求める。
- ・ 学生の格差の是正が問題であり, 現在の改善が適切とは思わない。
- ・ 難しいという指摘に関して内容は変更しない。大学生として習得を求められる内容に変更はないと考える。
- ・ 講義中は自分のノートを作成することを要求し, レジュメは復習用に使用, 授業中は内容

を集中して聞き、質疑応答は授業終了後としている。

- ・ 教室のサイズについて、10名前後に相当は教室がないため普通教室を利用している。
- ・ 授業中寝ている学生を注意して欲しいという要望については、教授法の改善で対策とする。

授業の大きな目的・目標に合致しない学生からの要望は、基本的には取り上げにくい、という教員の意識がある。たとえば、ノートテイクを自分なりに工夫してほしい、という目標があるので、板書の量を増やしてほしい、という要望はすぐに反映することは難しい。

一方で、学習している学生自身の意識や動機、学習態度に改善の余地があると考えている教員も多い。たとえば、もっと簡単な内容にしてほしいという要望は、大学教育の観点から見て、実現することが学生のためになるとは考えにくい。

施設・設備に係る要望も多数あるが、適当な大きさの教室の不足や、機器（ヘッドフォンなど）の共用を問題視する要望に対しては、変更ではなく丁寧な説明を以って対応する、としている教員が多い。

2.3 その他独自の改善案

主な回答は以下の通りであった（抜粋、記述を要約したものを含む）。

- ・ 科目に即した新しい資料を配布し学生の興味、関心を喚起した。
- ・ 時事的な題材を多くして現代の問題を分析する力を高めることを目標とする。
- ・ テキストにはない、事例を題材とする課題演習の導入を行った。
- ・ レポートは必ず講評を行い、レポート作成能力向上にむける。
- ・ 新聞記事やテレビ番組録画を多用し、業界の最新情報を提供している。
- ・ マイクロコンピュータの計測制御のための教材の改良により応用力を増大した。
- ・ 市販のテキストよりもオリジナルのプリントを作成する。
- ・ 授業に第一線で活躍する講師を招聘し、学生の資格取得を目標にした。
- ・ 大学院進学にむけての特別講義と、一度受講した講義のスキルアップとして自主参加ゼミの開催を行った。
- ・ 検定受験指導の実施。
- ・ 受講学生のテストの平均と分布を開示し、学生が自分の評価を客観的にわかるようにした。
- ・ KVA 祭や学外でのコンテストに参加、イベントの企画等、学生にデザインへの興味を高めるように指導した。
- ・ 個人のペースやレベルで学習できる環境づくりを行った。
- ・ 演習室で他のウェブページなどを見ないように、全員が授業に集中するように工夫した。
- ・ 授業後感想を聞いて学生が理解したか否か把握する。
- ・ 授業時に配布する資料整理の習慣を指導した。
- ・ 教員として人を惹きつける話し方を意識的に勉強するようにしている。

学生の興味を喚起するために、分野によってさまざまな授業方法の工夫がなされていることが明らかになった。時事的な問題を扱う、多くの事例検討を導入する、独自の教材や制御装置を開発する、など

がその例である。

また、学生のニーズに合わせ、大学院進学や資格取得のための指導を授業と併せて実施している例も報告された。

一方で、学生が客観的に自分自身を把握できるようにするために、テストの結果の公表を行いクラス内で自分の評価を知る、学内外のコンテストに参加を促すなどの方策を導入している教員もいた。

さらに、学生それぞれのペースに合わせた学習ができるような環境作り、集中できる授業、学生の理解の把握、資料整理の習慣の指導など、授業の中で工夫できることを実践していることがわかった。その他、話者としての教員自身のスキルの向上を意識している教員もいた。

3. 総括と今後に向けて

教員各自が真剣に学生の声に耳を傾け、自主的に授業改善していることが伺われた。今後は、この結果および授業改善アンケートへの教員対応をウェブ上で情報開示すべく検討する。

特に、学生からの要望を取り入れにくい場合に、どのように学生側に伝えるかという双方向コミュニケーションの手段も必要である。学生側にとっても每期行われる授業改善アンケートの成果を理解すれば、一層、アンケート実施を真摯に受け止めるという相乗効果が期待できる。

授業改善は、各教員が常に心がけるものであり、授業改善アンケートで平均点に達していればそれで良いというものではなく、自主的に目標をかかげて常に授業改善を継続することが趣旨である。しかしながら、一部の教員に誤解があるのが散見されるので、「平均点に達しているのに改善の必要は無い」という回答は不十分であることを理解いただきたい。

尚、平成 23 年 11 月 7 日に行われた文部科学省の設置計画履行状況に関するヒヤリングでも、授業改善に関しての質問があった。全大学的に重要項目であるので、FD・SD 委員会としても更に重視し、改善していく計画である。